

~~~~~  
 研 究  
 ~~~~~

## 統合保育における保育カンファレンスの方法とその効果 —グループインタビュー法を用いた障害児の個別支援計画作成に関して—

松井 剛太<sup>1)</sup>, 七木田 敦<sup>2)</sup>

### 〔論文要旨〕

本論では、統合保育において障害児の個別支援計画作成するにあたり、保育カンファレンスを活用した。保育カンファレンスの方法としては、グループダイナミクスを生かすことを考え、グループインタビュー法を採用した。その結果、対象児やその保育に関する参加者相互の共通認識が生まれ、保育カンファレンス参加者全員の意見が反映された支援計画作成がなされた。また、統合保育においてグループインタビュー法を用いた保育カンファレンスの活用には、保育カンファレンスの成立要件である「話の具体性」を満たすことや幼児期から生涯にわたって異業種間の連携のもと、障害児の支援を行うツールとしての可能性が示唆される結果となった。

**Key words :** 統合保育, 保育カンファレンス, グループインタビュー, 障害児, 個別支援計画

### I. はじめに

障害のある幼児と障害のない幼児とを一緒に保育するいわゆる統合保育という形態が、多くの保育所や幼稚園において実施されてきている。統合保育の実施に関しては、障害児にとって、健常児にとって、また、保育者にとって、など多側面からその有用性が明らかにされている<sup>1)</sup>。しかし、統合保育の実践には困難があるのも事実である。例えば、障害児の対応をする際、担当の保育者がすべての責務を抱えて困窮するといった事態がみられる<sup>2)</sup>。そういった中、障害児への対応を関係者集団で支える体制づくりが望まれている<sup>3)</sup>。

近年、保育現場において、子どもの理解や保育の方法を議論する場として、保育カンファレンスが注目されている<sup>4)</sup>。これはもともと医学や臨床心理学の分野で行われてきた「カンファ

レンス」を応用したもので、保育者を中心に子どもの保育に携わる関係者によって実施されている。その効果としては、多くの保育者と意見交換できることによる子どもの理解の促進<sup>5)</sup>、保育活動や子どもに対する接し方の省察<sup>6)</sup>が指摘されている。つまり、保育カンファレンスには、子どもの理解や支援の検討にあたり、グループダイナミクスによる効果が期待できるといえよう。

しかし、これまでの先行研究では保育カンファレンスの方法に関して具体的な提示がされているものは少ない。保育カンファレンスの運営については継続した実施の困難さや管理職の優位性<sup>7)</sup>など、まだまだ課題がある状態である。

本研究では、保育カンファレンスの方法にグループインタビュー法を採用した。グループインタビュー法はグループダイナミクスによって質的に情報把握を行う科学的な方法論の一つと

A Study of Teacher's Conference in Kindergarten for Making Individualized Support Plan of Children with Special Needs : Using the Group Interview Method

[1675]

Gota MATSUI, Atsushi NANAKIDA

受付 04.12.13

採用 05. 3.30

1) 広島大学大学院 (大学院生) 2) 広島大学大学院教育学研究科 (助教授)

別刷請求先: 松井剛太 広島大学大学院 〒739-8524 東広島市鏡山一丁目1番1号

Tel : 082-424-6884 Fax : 082-424-6884

され、保健や医学の分野では、利用者の意見を直接反映できる手法として注目されている<sup>8)</sup>。

本論では、幼稚園で行われている保育カンファレンスの方法としてグループインタビュー法を利用し、障害のある幼児の支援を検討した実践事例を報告する。

## II. 対象と方法

### 1) 対象

H市にあるF幼稚園の職員（副園長，教諭，養護教諭）6名を対象に2003年4月から2004年3月にわたって全14回のグループインタビュー法による保育カンファレンスを行った。保育カンファレンスの主題はF幼稚園にいる自閉症児「A児に対する支援の計画と実践」とした。なお、本稿では、対象児の入園後初めて実施された第一回カンファレンスから、支援計画が完成した第三回カンファレンスまでをとりあげる。これは、障害児の支援計画作成を行う過程が顕著に示されていると考えたためである。

### 2) 方法

各保育カンファレンスの目的を、①A児に関

する情報の把握、②A児に対する支援目標の設定、③A児に対する具体的支援の立案、と設定し、以下の日程で保育カンファレンスを実施した（図1）。

筆者はインタビュアー（司会）として参加し、保育カンファレンスの日程や議題を調整する役割を担った。また、事前の連絡事項、保育カンファレンスの結果を文書化して他の参加者にメールリストで送付した。

### 3) 分析

グループインタビュー法の分析方法は多様であり、インタビュー内容の活用しだいでさまざまな分析方法が使用できるとされている<sup>8)</sup>。だが、基本的には、①記録（すべてのメンバーの言語的表現、非言語的表現を記録する）、②一次分析（記録の中から重要アイテムを抽出する）、③二次分析（重要アイテムから重要カテゴリーに分類し、全体像をつくる）の順に沿って行われる。本研究では、各保育カンファレンスにおける分析の視点を図1のように設定したうえで分析を進めた。

## III. 結果

筆者が保育カンファレンスでの議論をすべてICレコーダーに録音し、それをもとに全発言を書き出した。その後、議論の流れの中で意味のある発言を「重要アイテム」（発言例参照）として抜き出し、議論の内容をカテゴリー分けして「重要カテゴリー」とした。以下、各保育カンファレンスの分析から導き出された結果を記す。

### 1) 第一回保育カンファレンス（4/24）

保育カンファレンスの目的は、A児のあらゆる情報を集約して、保育カンファレンスの参加者がA児の「できること」、「課題であること」について共通理解を持つことである。

インタビュアーである筆者は、A児が「できること」、「課題であること」を順に質問していった。結果、『身辺自立』、『遊びの様子』、『対人関係』、『言葉』、『身体機能』の五項目にカテゴリー分けされた。第一回保育カンファレンスの結果は表1のとおりである。

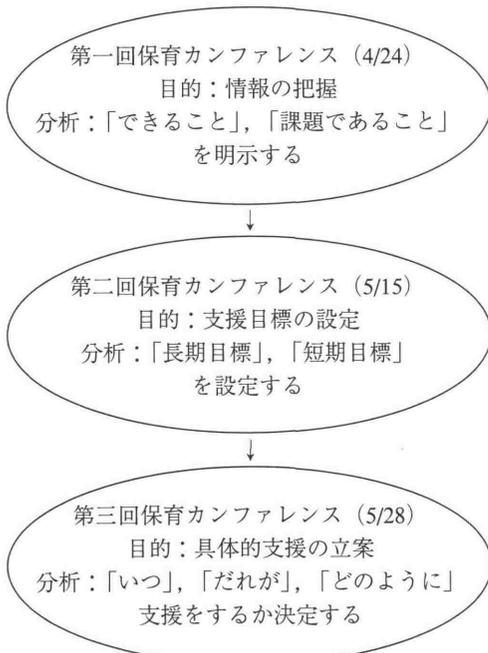


図1 保育カンファレンスの流れ

表1 第一回保育カンファレンスのまとめ

<p>&lt;できること&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 弁当の準備ができる (身辺自立)</li> <li>• 好きな遊びを集中して最後までやる (遊びの様子)</li> <li>• 大人にクレーム行動で要求する (対人関係)</li> <li>• 言葉の理解はある程度できている (言葉)</li> <li>• 運動は全般的にどんな活動もできる (身体機能)</li> </ul>
<p>&lt;課題であること&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• ルーチンワーク, 排泄, 食事の片づけを一人でするのが難しい (身辺自立)</li> <li>• 友達と一緒に遊ぶことはない (遊びの様子)</li> <li>• A児から他者に話しかける, 言葉を発することをしない (言葉)</li> </ul>

<発言例：身辺自立に関して>

「ルーチンワーク(登園直後に行う, 靴の着脱, 連絡帳にシールをはる, 自分のタオルをかける, かばんをしまうという一連の行動)は保育者が付き添ったらやるが義務感はなさそう, 「排泄のとき, 下着がひざまで降りない, 「弁当(食事)準備は一人でできるけど, 片づけはやらない」

2) 第二回保育カンファレンス (5/15)

保育カンファレンスの目的は, 第一回の保育カンファレンスで得た情報をもとに, 対象児の短期目標と長期目標を設定することである。

インタビュアーである筆者は, 前回の保育カンファレンスの結果をふまえて, 具体的にA児の短期目標を挙げるよう質問した。参加者の回答は口頭ではなく, 10分間で可能な限りメモ用

表2 第二回保育カンファレンスのまとめ

<p>目標の柱：①生活の自立</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>②友達関係の充実</li> <li>③言葉の理解・表出</li> </ul>
<p>長期目標：①朝のルーチンワークを一人でできる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>②他者に意識を向ける</li> <li>③言語指示を受け入れ, 行動する</li> </ul>
<p>短期目標：①あいさつできる</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>②他者と手をつなぐ</li> <li>③ルーチンワークを先生の支援を受けてできる</li> </ul>

紙に記述してもらふこととし, その後, KJ法<sup>9)</sup>の要領でカテゴリーに分類した。結果, まず八つの小カテゴリーが成立し, それらをさらに, ①生活の自立, ②友達関係の充実, ③言葉の理解・表出の三つの大カテゴリーに分類した。その後, 各大カテゴリーについて話し合いを実施し, 短期目標・長期目標の精査がなされた。第二回保育カンファレンスの結果は表2のとおりである。

<発言例：生活の自立に関して>

「ルーチンワークを一人でやるのはまだまだ早い, 「(ルーチンワークは) 保育者が付き添って指示すればいい, そうすれば言語理解の方にも通じる」

表3 第三回目保育カンファレンスのまとめ

<p>①あいさつできる</p> <p>「いつ」…登園, 降園</p> <p>「だれが」…全保育者, 機会があれば友達</p> <p>「どのように」…</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 正対して「おはよう, 「さよなら」を言う。A児と正対するために, ①A児の名前を呼ぶ, ②保育者から視線を合わせる, という二つを使用する。①でダメなら②で支援する。</li> <li>• 友達との間でも, 先生が促進者となって支援する。</li> </ul>
<p>②他者と手をつなぐ</p> <p>「いつ」…機会があれば。特に集団活動</p> <p>「だれが」…担任, 副担任を中心に</p> <p>「どのように」…</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• A児と先生 ⇒ A児と先生と友達 ⇒ A児と友達というステップで進める。集団活動では, 散歩で手をつなげるので, 散歩で友達と二人組, 「かごめかごめ, 「はないちもんめ」などの遊びでは先生と友達とA児の三人組ができるように支援する。</li> </ul>
<p>③ルーチンワークを先生の支援を受けてできる</p> <p>「いつ」…登園直後</p> <p>「だれが」…担任, 副担任</p> <p>「どのように」…</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>• 指差しと声かけ ⇒ 声かけのみ ⇒ 何もいわずに付き添う, というステップで, 徐々に支援を減らしてかわりを持っていく。</li> <li>• シールはりは, シールをはる位置とカレンダーの数字とが合わせて見えるように声かけ・指差しをして支援する。</li> </ul>

### 3) 第三回保育カンファレンス (5/28)

保育カンファレンスの目的は、第二回の保育カンファレンスで決定した短期目標に対する保育方法の検討を行うことである。具体的には、「いつ」、「だれが」、「どのように」支援をするかを決定する。

インタビュアーである筆者は、各短期目標に対して、どのような形での支援が可能であるか質問した。そして、議論の展開に合わせて、「いつ」、「だれが」、についても回答を促した。質問に対して、参加者は事例をあげて回答した。第三回保育カンファレンスの結果は表3のとおりである。

〈発言例：目標「あいさつできる」に関して〉

「向き合えば、保育者とのあいさつはほとんどする」、「本児の視線に移動すると目は合うが、あいさつはしてくれなかった」、「友達とはしない」

以上の保育カンファレンスの結果をまとめ、支援計画一覧表を作成した(表4)。

## Ⅳ. 考 察

### 1) 保育カンファレンスの有用性について

本研究では、統合保育において障害児の支援計画を作成する際に保育カンファレンスを活用した。結果、障害児の担当保育者だけでなく、園内のすべての保育者がかかわった支援計画の作成を可能にした。

保育の実施に移行した後も、保育カンファレンスの対象であるA児に関してすべての保育者が共通認識を持ち、保育者相互にも一貫した保育を実施する様子がみられた。そうして園内の保育環境が整った結果、保育を受けるA児にも変化がみられ、保育目標を順調に達成していった。

障害者への支援は、幼児期から生涯にわたって継続的に一貫性をもって行うことが明示され、一人ひとりの子どもを支援するシステムの構築が図られている<sup>11)</sup>。つまり、教育や医療等の専門家、保護者を含めた関係者による異業種間連携(横の糸)や幼保・小・中・高等学校による学校間連携(縦の糸)を密接に行い、子どもを中心に据えたネットワークの拡大が期待されているといえよう。幼児期においては、その

土台づくりを行う重要な時期であると考えられる(図2)。

保育カンファレンスは参加者の経験や特性による多様な見方をつき合わせる場として機能するものである<sup>5)</sup>。つまり、幼児期における保育カンファレンスの定着は、その後の障害児・者の人生を取り巻く環境において、関係者を相互につなぐ架け橋の基盤となる可能性があると思われる。

### 2) グループインタビュー法の可能性について

グループインタビュー法には、メンバーを主体とした質的な情報把握ができる、という特徴がある<sup>8)</sup>。この特徴は本研究においても確認され、対象児の情報を質的にとらえることにより、具体的に保育実践に生かせる支援計画の作成が可能となった。

保育カンファレンスの成立には、「話の具体性」、「実践との循環性」、「発言の対等性」が必要であるとされる<sup>10)</sup>。例えば、司会進行の仕方によっては、目的が明確になされないことで参加者の意欲が低下し、雑談として保育カンファレンスが終了してしまう場合もある。筆者は対象児の支援計画を立案する際、対象児の担任だけでなく、すべての保育者が支援の実行者になることを意図し、グループインタビュー法を採用した。グループインタビュー法では、保育カンファレンスの開始時に目的を明確に具体的に提示する。本研究においても、各カンファレンスの開始時に表を提示し(例:表4)、それを完成させるために議論を進めることを説明した。結果、保育カンファレンスの目的が明確化され、参加者の意欲向上により、活発な意見交換がなされたと考えられる。これは、グループインタビュー法が「話の具体性」を成立させるのに有効であり、複数の参加者からの意見を集約するのに適した方法であるためであろう。

しかし、本論においては、残りの「実践との循環性」、「発言の対等性」については検討が十分ではない。今後は、対象児の障害特性や小学校への接続等も考慮して、保育カンファレンスと支援計画の活用について検討する必要がある。

表4 A児の支援計画一覧表

子どもの名前		A児		所属クラス		年中	
目標の柱：①生活の自立 ②友達関係の充実 ③言葉の理解・表出				一学期の目標（長期目標）：①朝のルーチンワークを一人ができる ②他者に意識を向ける ③言語指示を受け入れ、行動する			
短期目標		日々の活動					
		登園	遊び	集団活動	食事（おやつ）	降園	
①あいさつできる（②）		正対して「おはよう」を言う。 正対するとき、 ①A児の名前を呼ぶ、②保育者から視線を合わせる、という二つを使用する。 ①でダメなら②で支援する。					正対して「さよなら」を言う。 A児と正対するとき、①A児の名前を呼ぶ、②保育者から視線を合わせる、という二つを使用する。①でダメなら②で支援する。
②他者と手をつなぐ（②）		状況に応じて	<ul style="list-style-type: none"> <li>「かごめかごめ」、「はないちもんめ」などの機会に応じて先生と友達とA児の三人組ができるように支援する。</li> <li>手遊び等の機会を作り、遊びを通してスキンシップに慣れていくよう支援する。</li> </ul>	A児と先生⇒A児と先生と友達⇒A児と友達というステップで進める。集団活動では、散歩で手をつなげるので、散歩で友達と二人組、「かごめかごめ」、「はないちもんめ」などの遊びでは先生と友達とA児の三人組ができるように支援する。	状況に応じて	状況に応じて	
③ルーチンワークを先生の支援を受けてできる（①、③）		<ul style="list-style-type: none"> <li>指差しと声かけ⇒声かけのみ⇒何もいわずに付き添う、というように徐々に支援を減らす。</li> <li>シールはりは、シールをはる位置とカレンダーの数字とが合わせて見えるように声かけ・指差しをして支援する。</li> </ul>					

<※短期目標内の（ ）は長期目標の対応番号>

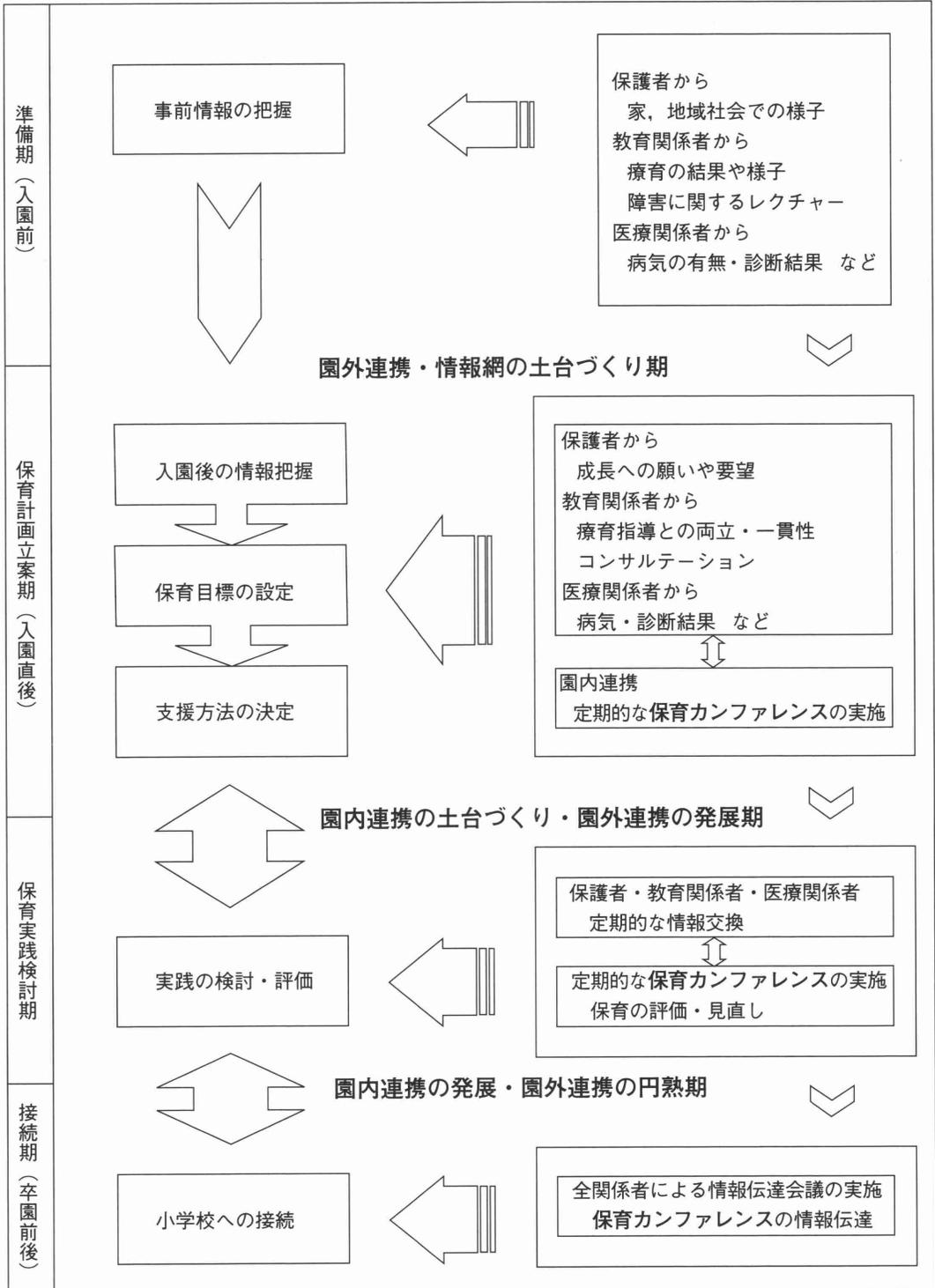


図2 統合保育における障害児支援の手順

## 引用文献

- 1) 清水貞夫, 小松秀茂. 統合保育—その理論と実際—: 学苑社 1987.
- 2) 橘実千代, 和田 薫. 統合保育に関する研究 (その2). 日本特殊教育学会第38回大会発表論文集 2000: 426-427.
- 3) 藤崎春代, 木原久美子, 倉本かすみ, 長田安司, 今西いみ子. 統合保育において子どもと保育者を支援するシステムの研究. 発達障害研究 2000; 22(2): 120-127.
- 4) 森上史朗. 特集 保育を開くための保育カンファレンス. 発達 ミネルヴァ書房 1996; 68: 1-4.
- 5) 平山園子. 保育カンファレンスの有効性. 保育研究 1995; 16(3): 18-29.
- 6) 大場幸夫, 森上史朗. 保育カンファレンスのすすめ. 保育研究 1995; 16(3): 2-17.
- 7) 鳥光美緒子, 中坪史典, 佐々木裕子. 保育観の意識化とそれに果たすカンファレンスの役割—保育行為を内省するとは— 広島大学教育学部・関係附属学校園共同研究体制研究紀要 2000; 28: 39-48.
- 8) 安梅勅江. ヒューマンサービスにおけるグループインタビュー法—科学的根拠に基づく質的研究法の展開: 医歯薬出版株式会社 2001.
- 9) 川喜田二郎. KJ法と未来学 KJ法普及の問題点KJ法と文明の未来チームワーク. 東京: 中央公論社 1996.
- 10) 田代和美. 保育カンファレンスの検討—第2部 研究者の立場から考える—. 保育学研究1996; 34(1): 34-42.
- 11) 文部科学省. 今後の特別支援教育の在り方について (最終報告). 文部科学省 2003.